

実践報告

他学科との合同ゼミの教育的効果と課題 —母語と父語に注目して

ウォント盛香織・木下 裕美子

The Impact and Problems of Joint Seminars – Focus on Mother Tongue and Father Tongue

WANT Mori Kaori and KINOSHITA Yumiko

Abstract : This paper discusses to what extent a joint seminar is effective to improve students' ability to handle mother tongue (=subjective language skill) and father tongue (=objective language skill), which are developed by Ursula Le Guin. After the joint seminar, instructors pick up problems of the joint seminar through examining students' survey, and discuss what kind of educational intervention instructors could do to improve students' performance by arranging classes that augment the students' skill of mother tongue and father tongue.

Key Words : students' acquisition of father (=academic, standard, and public) tongue and mother (=non-academic, relationship) tongue through joint seminar, education program for women, improvement of students' academic skills

要旨：本稿の目的は、アーシュラ・K・ル＝グウィン（Ursula Le Guin）の母語・父語に関する議論を参照し、英語文化学科と多文化コミュニケーション学科の学生が、卒業研究の合同ゼミを行うことで、学生の母語（親密性の高い言葉）と父語（客観性の高い言葉）の使用能力を分析し、さらに合同ゼミ終了後に学生へのアンケートを通じて両言語能力ならびに合同ゼミそのものの在り方の問題点を抽出することで、学生がよりよい母語、父語の使用者になるよう、合同ゼミという方法も含め、教員が今後どのような女性教育としての授業展開を行うことが、母語・父語能力を通じた学生たちの効果的なパフォーマンスの向上につながるのか議論することである。

キーワード：学生の合同ゼミを通じた母語・父語の獲得、女性教育カリキュラム、学生のアカデミックスキル向上

研究の背景と目的

本学では「女子学」、「リーダーシップ」等、学部・学科を超えた教育の試みが多く行われている。こうした試みを通じて、学生は自分が属していない他学部・多学科の学習を知り、自分の属している学科では知りえない、学びの広さや奥深さを知ることができ、自らの専門的な学びの助けとすることが期待される。本研究もこうした学びの流れに沿うものであるが、先行の教育取り組みと異なる点は、卒業研究という学科の専門的学びの総まとめの授業を、英語文化学科と多文化コミュニケーション学科の二ゼミで、合同ゼミという形で行った点である。

二ゼミで合同ゼミを実施した背景としては、担当教員であるウォント盛と木下の研究領域に、ジェンダーと海外研究という共通項目があり、学生の多くがアメリカ合衆国（以下、アメリカと表記する）やフランスといった海外の文化や社会を研究対象とし、研究にジェンダー視点を取り入れているため、親和性があるからである。

学生たちは通常、ゼミ単位の教員指導のもと、レポート作成や報告の基礎的な作法について修得している。この中で学生達はゼミ員との関係性やネットワークを作り上げるための親密性の高いことば（母語）で研究テーマを深めてきた。社会においてはこうした個性の高い会話ではなく、客観性を追求する思考のことば（父語）による説明や個性より集合的な意義を述べるものが求められる。

他学科との合同ゼミを行うことで、学生たちは、自ゼミ以外の学生、つまり自分の行っている研究内容を全く知らない他者、に自分の研究を説明し、質問に対して返答することで、客観性の高い言葉（父語）を操る能力を高め、各報告に対する相互評価シートを用いて報告を理解することに努め、クリティカルな視点でコメントし、他学科学生の研究を知ること視野を広くし、合同ゼミでの経験が卒業研究の質的發展につながることを教育目的として設定された。この目的のために、二ゼミによる合同ゼミが2018年5月10、17、31日の3回に渡って開催された。本論は、合同ゼミの内容について報告し、学生たちが記述した相互評価シートならびに合同ゼミに関するアンケートから、をその教育的効果を分析し、今後の課題について考察を行うものである。尚、本合同ゼミは、多文化コミュニケーション学科で実施されている女性教育カリキュラムプロジェクトの一環としても行われている。

合同ゼミ現場におけるコミュニケーション：ふたつの配慮

ジェンダーの観点からみた場合、本学が女子大であることから教室内で、置かれている状況や対人関係にジェンダーを作り出していくこと、つまり、どのような女／男であろうとしているのかが観察されることは少ないと考えられる。一方で、学生たちは教室外で積み重ねられてきた体験によっても「ことばを使う行為」を習得していく（中村 2001、2010）。したがって、女子大の教室内では女子であるというまなざしから比較的自由でありうる特殊な空間であることを認識した上で授業を行うことになる。今回の活動を行う2つのゼミは卒業研究であり、研究目的を明確に設定し、客観的で合理的な方法論を用いて、根拠を示しながら論理的な議論展開を行うことが期待される。すなわち、客観性を追求し、情報を携え、他者が理解できる論理性を備えた明快なことばによって伝える能力を獲得することを目的とし、その報告が評価される場である。そのため、普段使っているような親密さや友好さを示すようなことばはこうした評価項目には何も役に立たない。これまで、ことばとジェンダーの研究からは、女性の発話スタイルには、言葉の中に経験に基づく意味を生成する過程から排除されてきたことによる沈黙（スペンダー 1990）であったり、協調性、他者への配慮や感受的受容が期待されるがゆえに感情の敏感さのほうが発揮され、言葉での主張が行為として表れにくかったりする（大坊 1998）。この他者から距離をおいた、客観的であれとされる言語によって作り出されている世界がまさに教育現場である。先に述べたようにこの世界で唯一用いられる言葉は、客観性の高い言葉である。本取り組みの目的を分かり易くするために、この男性が作り上げた言葉を基盤としたこのことばに対してル＝グウィン（1986：2006）が使用する用語である「父語」を用い、一方で、ジェンダー研究からみた女性性のあることばを「母語」とする。女性たちは母語の使用になじみ、日常的な場面に習得されるジェンダーコミュニケーションの作法として、丁寧さや配慮が評価されてきた（ミルズ 2003＝2006、れいのずる秋葉・永原 2004）。配慮は評価される項目であり、身につけていることが当然とみなされるものとなる。

また、合同ゼミでは、一方のゼミの学生は自分たちの仲間やそのテーマを知っている人の集団であり、他方はそれらを知らない人たちの集団である。こうした見知らぬ他者同士は不確実性を減少させるために人はコミュニケーションをとり、そこから人間関係が生まれると指摘される（西田 2004）。しかし、ゼミの時間には研究テーマにかかわる質疑応答しか基本的には行わず、この不確実性の中で学生たちは相手が「ゼミに参加する学生として提示する公的な」情報のみ（研究テーマと内容）を受け取り、発言することが求められ、人間関係が生まれるような気配はいったん排除された空間である。不安や心配にあるとき、伝達の方法や効果に配慮した工夫のほう聞き手に対処する力を引き出し、対応しようとする具体的な行動を後押しする（吉岡 2011）。したがって、学生たちにとって卒業のかかった研究を見知らぬ他者に向かって報告し、評価される緊張した空間で行うプレゼンテーションで重視されるのは配慮であり、その返礼として相手からも配慮を求めることが考えられる。

こうした異なる背景から求められるふたつの配慮が表現されることばを母語とし、客観性をもとめる言葉を父語として、後者の獲得を目指した合同ゼミの内容について次に説明する。

合同ゼミの内容

合同ゼミは、2018年5月10、17、31日の3回に渡って行われた。報告した学生は、ウオント盛ゼミが16名、木下ゼミが9名（3名報告欠席）である。各学生の卒業研究内容は以下である。

ウオント盛ゼミ 卒業研究タイトル名	論文とジェンダーとのかかわり 強い○ 普通△ 弱い×
『ミス・サイゴン』の分析を通じたアメリカンに関する研究	○
日系混血アメリカ人アーティスト・イサム・ノグチに関する考察	×
<i>How My Parents Learned to Eat</i> の分析を通じた日米国際結婚カップルに関する研究	○
日米メディアにおける戦後混血児の表象に関する比較研究	△
<i>How to be an American Housewife</i> の分析を通じた日米文化差異に関する研究	○
『モッキングバードのいる町』における戦争花嫁ステレオタイプと当事者言説の比較分析	○
ジュシカ・サイキの『プルメリアの日々』の分析を通じた日本人のハワイ移民の歴史と暮らしに関する研究	△
『No-No Boy』の分析を通じた日系アメリカ人の強制収容に関する研究	×
映画『スタンドアップ』の分析を通じたアメリカにおけるセクシュアル・ハラスメントに関する研究	○
『過越しの祭』の分析を通じたインターマリッジに関する研究	○
ヒサエ・ヤマモトの「ミス・ササガワ伝説」の分析を通じた強制収容が日系アメリカ人に与えた心理的影響に関する研究	○
Velina Hasu Houston『Tea』の分析を通じた戦争花嫁のアメリカでの居場所の創生に関する研究	○
ヒサエ・ヤマモト「ラスベガスのチャーリー」の分析を通じた日系アメリカ人の強制収容に関する研究	×
『ハワイ移民修羅の旅路』の分析を通じたハワイの日系アメリカ人一世・二世のジェネレーションギャップに関する研究	△
『嘉間良心中』分析を通じた沖縄女性とアメリカ兵の関係性に関する考察	○
アンケートを通じた日本におけるフラ人気に関する分析	×
木下ゼミ 卒業研究タイトル名	
LGBTのカミングアウトについて	○
ニュージーランドのプレイセンターは日本の育児問題の解決の手助けとなるのか～今後の最適なWLBを考える～	○
なぜ日本人女性はフランス人女性をカッコいいと思うのか	○
私たちの「着心地」	△（女性の衣類限定）
フランス語圏の言語政策について	×
定住外国人との共生社会（欠席）	×
日仏の若者が国際交流する方法とは	×
オーガニックが生み出す私たちの生きる豊かな社会（欠席）	△
カフェにおける地域活性化（欠席）	×
韓国の美容事情	○
バックパッカーから学ぶ	○（女性のバックパッカー限定）
パートナーを選ぶこと	○

合同ゼミを始めるための事前準備として、学生には以下7点について述べるができるようになることを目指し、プレゼンテーションを準備するように指導をした。

(1) 研究目的 (2) テーマ紹介・研究の動機（なぜそのテーマに興味をもったのか・テーマの重要性・個人的な動機から社会における意義について）(3) 背景 (4) 研究上の問い (5) 研究の方法 (6) 今後の研究予定（進捗状

況報告をかねて）(7) 参考文献（今回の報告で、どこでどう利用したのか・先行研究と自分の研究の違い）

ゼミ当日は、ウォント盛ゼミの学生と木下ゼミの学生を混ぜて4－5名のテーブルに座らせた（5グループ）。座席指定は行っていない。発表にも二ゼミの学生が交替で全体に向けて行った。発表は一人約5分で、その後教員、自ゼミ以外の学生からのコメント・質問が約5分という構成をとった。合同ゼミを聞いている学生には、相互評価シートに記入するよう指示した。相互評価シートの内容は以下である。学生は各項目について、次のスケールで評価している：1：そう思わない 2：あまり思わない 3：少しそう思う 4：そう思う。

記入内容	平均値
1) 研究内容は明白だ。	3.84
2) テーマ紹介・研究の動機（なぜそのテーマに興味を持ったのか・テーマの重要性）についてよく理解できた。	3.86
3) どうしてその問題が生じてきたのか、現状分析ができています。 （いつからその問題があるのか、どうしてそこが問題だと気付いたのか、など）	3.73
4) 研究の方法が適切である。	3.82
5) 今後の計画を聞いて、必ず期限内に完成できそうだと思う。	3.91
6) 参考文献（今回の報告で、どこでどう利用したのか・先行研究と自分の研究の違い）が分かった。	3.84
7) 最後に、報告者へのメッセージを自由に記入してください。	

平均値の高い数値からもわかるように、学生はおしなべて互いの研究を高く評価している。これは批判的に他者の発表を見る能力が低いからなのかと推測されるかもしれないが、(7) の報告者への自由記述を見ると、学生は必ずしも肯定的な意見だけをしているわけではないことがわかる。例えば、「オリジナリティがいまいちわからない」、「(考察をする際) 主観的な言葉が出てしまうのではないかと思ったので、言葉の定義などを決める必要があると思います」、「アメラジアンに関する説明で何かしらの文献から参考にしていれば参考文献に付け加えたらよいと思います」、「しっかりスケジュールをたてないと間に合わないかもしれませんので…。お互いががんばりましょう!」アンケートはどれくらいの人数、またはニーズはどうするのか気になりました。」、「(研究の) 動機があればなお良いと思いました!」(回答の表現は学生の記述のまま)、といったコメントが見られた。こうしたコメントから考えられることとは、学生は互いの研究について高く評価しつつも、用語の定義が不明である、時間管理に不安要素が見られる、参考文献が不十分である、アンケートの実施方法が不明である、といった卒業研究作成上での基本ルールを十分に理解したうえで、その基本ルールが脆弱な論文には、相手を気遣った言葉でやんわり指摘しているということである。

合同ゼミの目的として、親密性の高いことば（母語）ではなく、客観性の高いことば（父語）による学生間の研究交流を挙げたが、実際は母語と父語の間でのやりとりが中心であったことがわかる。父語での客観的な交流が完全に達成されたわけではなかったが、学生は互いの研究を批判的にきちんと見ており、二ゼミ参加学生は、卒業研究を行う上での基本的知識を身に付けているといえる。さらに、客観性の高い評価を行うために相手の報告姿勢を気遣い、寄り添う感覚的な表現を添えることの重要性を彼女らが提示していることだと言えよう。この点は合同ゼミを企画した教員にとって彼女たちの作り出す新しい議論の作法を感じさせることになった。

これまで、研究の活動においては客観的な発言を行い、話者と聞き手を隔てる「父語」の重要性を優先し、その獲得のために、無意識的に「母語」の価値を優位にとらえることが特段重要であるとは考えられなかった。しかし、彼女らは専攻が異なり、普段出会ったこともない相手たちと研究上の慣れない議論を行うためには、母語を通じて寄り添う言葉を付け加えることで質疑応答する仲間として安心できる空間を作そうとしていたのではないかとのことである。しかも、それを父語に押し流されることなく、彼女たちは彼女たちなりの空間づくりを行っているのである。教員が指導の中で父語の達成を目標に掲げたことは、実は、母語で語りえること、傾聴し、話し合うことの可能性を否定していた行為にもなり得よう。言い換えれば、彼女たちが説明し議論する主体としての営みを獲得するといった当初の意図があったにも係わらず、その目的に真っ向面から衝突してしまうことだったのかもしれないのだ。このように、議論する空間における関係構築的な言葉「母語」が差し挟まれるこのまどろこしさは、普段の生活の中で彼女たちが求めていることであり、その点において配慮したことばが評価され、その技能を高めることも見逃してはならないのであろう。当然、議論する空間が非日常的な空間であるとは考えら

れないからである。この点は今後十分に検討されるとして当初の授業目標の検討に戻ろう。

上記の新しい発見の一方で、これまで通り、社会や大学では他者と距離を隔てた「父語」の達成が追求される。つまり、女子大というこの母語になじんだ限定的な環境は卒業後続くわけではないことは明らかである。そして、おそらく彼女たちはこの文化の違いに立ち向かってはいかないだろう。そのようなリスクをだれが、そして、なぜ彼女たちだけがそれを負うだろうか。したがって、我々が設定した目標に沿った「父語」獲得の実践はやはり手放してはならないものである。この実践を経験したその上で、学生たちは、合同ゼミ終了後に何を感じ、何を考えたのであろうか。そして合同ゼミは、どのような教育効果を学生に与えることができたのだろうか。合同ゼミ後に行ったアンケート結果を分析することで、諸質問に対して考察を試みる。

合同ゼミに対する学生のアンケート結果の分析

筆者たちは、合同ゼミ後に、学生に合同ゼミを体験してどのように感じたかアンケートを取った。回答には、回答数が多かった項目ならびに、筆者たちが、今後の課題として重要であると思われる項目を任意で選んでいる。回答の表現は学生の記述のままである。以下がアンケートの結果である。

質問 1 合同ゼミで発表するにあたり大変だったことは何か？
回答 1) 今まで違うことを勉強してきたゼミの人たちに自分の研究を説明すること (4名) 2) 他学科との合同なので普段より緊張しました。(1名) 3) 質問を今までできていなかったので疑問点に気付くことができなかったで、先生の質問は役に立ちました。わかりにくかったのでわかりやすく質問して頂きたいです。(1名) 4) 自分の研究のオリジナリティを考えるのが難しいこと (1名) 5) 限られた時間で、他ゼミの研究内容を把握するのが大変でした。(1名)
質問 2 他学科の学生の発表についてどのように感じましたか。
回答 1) 全く違う感じの発表でとても興味深かったです (9名) 2) 様々な研究があり、それぞれ研究の仕方には沢山あるのだと思った (3名) 3) 初めて(自分の知らないこと)、聞いた題材なので理解することが難しかったです (2名) 4) 深掘りができてないと思いました。(1名) 5) 他学科はどこまで進んでいるのか非常に気になっていたので、合同セミナーをして良かったと思います。(1名)
質問 3 他学科の発表をきいて、自分の研究についてどのように感じましたか？
回答 1) もう少し深掘りしていかなければならないと思いました (10名) 2) 自分内容を相手にわかりやすく伝える必要があると感じました。(2名) 3) みんな進んでいて自分ももう少し進めていきたい (1名)
質問 4 合同セミナーを受けてよかった点は何ですか。
回答 1) 異なった視点に気づきました (14名) 2) 多くの人の前で発表することがないので貴重な経験になりました。(1名) 3) 深く考えるきっかけになったこと (1名)
質問 5 合同セミナーの悪かった点は？
回答 1) 時間が短い点です (7名) 2) 2クラスで方法など統一されていないところ (2名) 3) もっと交流しやすくしてほしいかったです。(1名) 4) 声が聞こえにくい (1名)

質問 1 の合同ゼミで発表するにあたり大変だったことは何か、という問いに対して最も多かったのが、「今まで違うことを勉強してきたゼミの人たちに自分の研究を説明すること」(4名)であった。この回答は、質問 3 の他学科の発表をきいて、自分の研究についてどのように感じましたか、という問いへの回答である「自分の内容を相手にわかりやすく伝える必要があると感じました(2名)」という回答と、質問 5 の合同セミナーの悪かった点に関して聞いた項目での、「みじかい間でうまく全てを伝えることができない」(3名)という回答と重なる。これら回答は、合同ゼミ開催の目的である、客観性の高いことば(父語)による説明を学生ができていないことから出

た回答である。学生たちは、ゼミの小さな空間の中で、ゼミ員との関係性やネットワークを作り上げるための親密性の高いことば(母語)で研究テーマを深めてきた。母語の中で、互いの研究を理解することに慣れている中で、その言葉へのアクセスを持たない他者が入った場合、学生は母語から客観性の高い言葉(父語)に自己表現の言葉を変換する必要に迫られた。そして、それが十分にできなかったことが、学生が「大変であったこと」として認識したことから、合同ゼミ開催目的に学生が気づいた点で、教育的効果が見られた。課題としては、この気づきを、いかに父語獲得につなげていくかということである。

質問2、他学科の学生の発表についてどのように感じましたか、という問いに関しては、圧倒的に「全く違う感じの発表でとても興味深かったです」が多かった。学生は自ゼミでの学びと全く異なるテーマを研究する多学科学士の研究に強い興味を示しており、それはアンケートだけでなく、相互評価シートにおいても同様のコメントが散見された。例えば、ニュージーランドのプレイセンターという、乳幼児を持つ保護者が互いの子どもを無償でケアする場所に関するプレゼンテーションに対して、「プレイセンターを初めて知ったので、とても興味が湧きました。プレイセンターのメリット・デメリットや幼稚園との比較などもっと詳しく知りたいです!!」というコメントがあったり、フィリピン女性とアメリカ軍兵士の間に生まれたアメラジアンと呼ばれる人々に関するプレゼンテーションに対しても、「アメラジアンという存在を今回の発表で初めて知りました。とても興味深いです」というコメントがあったりと、学生たちはそれまで聞いたこともない様々な新たな情報に触れて、知的好奇心が強く刺激されている。

質問2は、質問4の合同セミナーを受けてよかった点は何ですか、という問いとも重なっており、この質問に対して学生の回答は、「異なった視点に気づきました」(14名)となっている。質問2、4から、学生は合同ゼミのような知的好奇心を刺激する機会を十分に享受する知的能力を持っており、こうした機会を継続的に学生に提供することが、教育上望ましいことがわかる。ただし、今回学生が互いの研究に強く関心を示すことができたのは、二学科、最大で28名という少数での実施であり、学生が緊張感をもって合同ゼミに臨んだからであると推察される。参加学生の人数が増えると、学生の当事者意識ならびに緊張感が薄れるため、効果的に合同ゼミを行うためには、少人数での実施が好ましいであろう。

質問3の他学科の発表をきいて、自分の研究についてどのように感じましたか、という問いに関しては、「もう少し深掘りしていかなければならないと思いました」(10名)が多かった。学生たちは、ほかの学生の研究発表、進捗状況等を知ること、自らの研究の不十分さを客観的に知りえたようである。合同ゼミを契機に、研究の質的发展につなげる、というモチベーション作りになったかと考えられる。しかし、5月に行った3回の合同ゼミで、学生のモチベーションをいかに卒業研究提出日(英語文化学科は2019年1月、多文化コミュニケーション学科は2018年12月)まで継続していけるのかは不明である。

質問5の、合同セミナーの問題点を聞く項目に関しては、多くが教員の今後の課題である。合同ゼミは当初2回で想定していたが、質疑応答が想定以上に長くなり、急遽3回実施に変更したが、それでも学生には短く感じたようで、「時間が短い点です」(7名)という学生の指摘につながった。また、学生達の質疑応答が一对一になりがちな形態であったため、対話につながる事がなかった。ひとつの質疑応答が次の質疑応答を生むような工夫について検討することが教員側で課題として挙げられる。

時間不足のため駆け足で合同ゼミを実施したために、「もっと交流しやすくしてほしいです」(1名)という回答につながったと考えられる。見知らぬ人たちと人間関係を築き、配慮の不安が少なくすむ環境の中での対話が求められていたのである。筆者たちは、二ゼミの学生間の交流を図るよう、座席を二ゼミ混成としたり、5月31日の最終合同ゼミ後には昼食会を催す等したが、一部の学生には物足りなかったようで、今後の課題といえよう。

「2クラスで方法など統一されていないところ」(2名)という回答は、説明を要する。筆者たちは学生に事前準備として、「これまでの指導を踏まえ、同じ形式で口頭報告を行えるように」としていた。ウォント盛ゼミの学生はパワーポイントで準備し、木下ゼミの学生はハンドアウトで準備していた。前者のゼミ学生は、研究概要をパワーポイントのスライドに準備し、詳細を口頭で話すという方法を取り、レジュメの配布はしていない。後者はハンドアウトを参加者に配布し、内容を読み上げるという方法をとった。二ゼミの発表方法の違いに戸惑った学生がいた。初めて聞く内容を効果的に他者に伝えるという合同ゼミの目的を果たすのは、どちらの発表方法が良いの

かに関しては議論が必要であろう。

以上、学生へのアンケート並びに相互評価シートから、課題が浮かび上がった。次にこうした課題にどのように、そしてどこまで対応できるのか考察を行う。

今 後 の 課 題

今後合同ゼミを行う場合、より高い教育効果を学生にもたすために、諸課題にどのように対応すればよいのか議論していく。

<学生の父語獲得と議論の中に胚胎する母語へ>

端的に言えば、慣れの問題ではないだろうか。彼女たちのアンケートや相互評価シートからみられる反応からは、「自分の研究を他の人に伝えることは難しい」、「初めて聞く人に対して分かり易く説明すること（は大変）」といったように父語に対する不慣れさが存在することが分かる。また、父語での回答を狙いとした教員の発話に対して「压迫面接みたいで怖かったです」、「といつめられる質問ぜめ（原文ママ）」で大変だったと述べていたが、同時に「まだまだ調べ足りないことが改めて分かって良かった」、「みじかい間でうまく全て伝えることはできない」と前向きに捉えている。要するに、学生たちはこれまで父語による経験や訓練が少なかったのであろう。高等教育現場は、父語によるコミュニケーションが一般的であり、カリキュラムの中にはその作法を修得するためのアカデミックスキルのような科目が存在している。併せて、日常的なゼミ活動の中で、客観的な言葉で語れるまで継続的に問いかけを行うことであろう。その効果的な方法に関しては学内で実施されるFDを通じて教員が獲得していくしかないと考えている。

加えて、学生たちが誉め言葉を多用していたことに着目すれば、この母語的な行為—ゼミ参加者たちとの連帯感を醸成する配慮と丁寧さ—の中に、情報を入れたり、内容を読みこむことができるように促してはどうだろうか。彼女たちの行為には、母語による議論の可能性も残されているのではないか。したがって、学術的な質問から離れることを許容しながら、学生たちの誉め言葉の中に客観的な記述を入れるように指示する方法から始めてみることも考えられる。

<学生達の質疑応答について>

今回のゼミ活動に見られた質疑応答は一对一の形態になりがちであった。しかし、ゼミの場は、教える／学ぶという形態は一方的なものではなく、発話により新たな展開を研究に持ち込む、共創的な場である。したがって、ひとつの質疑応答が次の質疑応答を生むような巻き込み方について考えることが必要である。それにはいくつか考えられるが、まず、本取り組みにおいては、学生の指摘にみられるように「交流のしやすさ」を伴った環境づくりが重要であったことが分かる。そのために、各グループ内での意見交換を組み入れてみることであろう¹。さらに、何が自分たちのコミュニケーションのコードなのかをはっきりとさせ、対話の相手が複数であることを可能とするゼミであるといった合意形成がなされている状況を作り出すことであろう。その状況の中で、アレンジした母語で対話することを教室内で評価していくべきなのかもしれない。その上で、一回きりの質疑応答にならないように、質問した回答の中に新たに質問として展開可能なポイントがないか、参加者たちに傾聴するように促すことであろう。さらに、質問の技法として「真似る」ことを大いに奨励することも考えられる。これらはまるで外国語を学ぶときに求められるような姿勢²であるが、女子学生たちの不慣れな父語コミュニケーションがすでに異文化であるとするならば有効な方法ではないだろうか。

もっとも、「交流のしやすさ」に支えられた合同ゼミにするためには、担当教員同士で授業の介入方法に関する

¹ こうした改善点を踏まえ実施したケースとして、2018年9月20日に多文化コミュニケーション学科木下ゼミ3年生は琉球大学経済学部3,4年生との合同ゼミを行った。全体プレゼンではなく、グループ内での研究報告に変更し、確認するポイントを簡単に教員（2名）がデモンストレーションや低度の介入を行ったことで、学生間の自由な交流頻度が高まった。

² Bruno Vannieuwenhuys (2004)「日本人学生はなぜ外国語の授業で答えることを拒むのか？—日仏における口頭表現の文化的スタイルについて」『国際比較研究のフロンティア—文化的多様性の視座から—』関西学院大学 大学院 社会学研究科、p.259-274.

話し合いや共通認識の確認を複数回行っておくことが課題として考えられる。そのためには教育改善に時間を割ける環境が整備されていることが望ましい。

＜モチベーションの継続＞

5月に行われた3回のゼミがモチベーションの継続に直接的に寄与することは考えにくい。ただ、1年を通じた卒業研究指導を補完することになったと言えよう。例えば、今回の合同ゼミで受けた質問や返却された相互評価シートのコメント欄にあった質問に今後答えられるように意識しながら卒業研究を続けている様子も観察される³。これは蓄積された父語とのコミュニケーションへと誘うだろう。同様に、具体的な機関名を挙げながら調査に行く予定があると答えた学生は、言質一致させるように調査を進めている。その活動の中で、調査倫理や調査依頼書の作成など新たな学習が求められ、父語とのかかわりを深めている。また、見知らぬ他者に自分のテーマを評価され、「完成したらぜひ見てみたい」、「おもしろそう(題材)」「また教えてください」「楽しみにしています」といった母語による関心と期待を示された学生は、それまでテーマを幾度も変えていたが報告の後にはテーマを変更せずに研究活動を進めている。父語だけではなく母語によるサポートがモチベーションの維持にどのようによどの程度必要であるのかについての認識は他の研究を待ちたい。

おわりに

本稿では、ル＝グウィンの使った「母語」や「父語」という用語を用いて、合同ゼミ活動における父語獲得の実験的取り組みとその課題について報告した。最終回の後に行われた昼食交流会への一部学生の不参加にみられるように十分な人間関係の構築には至らなかったが、3回の合同ゼミ活動を通じて、学生たちは改めて客観的な言葉「父語」で説明することの不慣れさを実感し、その経験と相手に対する配慮が共有された。必要性を感じた父語とその不慣れさを補う実践は継続するべきであろう。ところが、父語獲得実践の教室内においてさえ、馴染みのある母語でコメントをすることは依然としてごく自然なことばとして使い続けられた。それは、今回の授業目標が達成できなかったというよりはむしろ、見知らぬ他者に対する配慮であり、母語によりアレンジされた議論の可能性を排除しない表れである。

したがって、母語と父語を学生たちが獲得し、状況によって使い分け、両者をアレンジして使うことが目指されるべきであろう。そうした彼女たちのことばによる行為が彼女らの参画する社会を作り上げるからである。あわせて、男性の家庭参画が進むことで親密圏になじむ母語との関係に変化を及ぼすであろう。そのため、それまで彼女たちは父語による社会参入を諦めてはならない。現在、彼女たちは常にだれもが積極的な発言の機会を与えられる女子大に在る。沈黙を求められることのない環境に慣れ、それを常識とみなすのである。ゆえに、人事担当者が考える優秀さの基準のなかには「課題の理由や解決策を考える力」よりも「相手を慮る力(気配りや“空気を読んだ行動”)」⁴が求められていることから、いったん社会にいれば、母語による配慮や丁寧なことばと父語をアレンジして主張することができる彼女たちは、女子大で養った常識をきつと隣人と共有するであろう。

そして、それらを支える教員が授業に関する情報交換をし、学生が示した「母語」による議論の可能性を検討する自由で構築的な時間が確保されるべきである。

謝辞

合同ゼミで回収したアンケート調査の集計は多文化コミュニケーション学科3年生林美紅さんが担当してくれた。林さんの協力に感謝します。

³ 多文化コミュニケーション学科4年生は6月最終週から7月第2週目にかけて卒業研究の中間報告会がある。その中で、学生Sは合同ゼミと同じ質問をうけ、しっかりと回答することができていた。その後の指導の中で、Sは、合同ゼミで受けた質問のおかげで準備ができたことや、コメントシートをコピーしその質問に回答できるように勉強をしたことを話してくれた(2018年10月18日ゼミにて)。

⁴ マイナビ「新卒採用における学生の「優秀さ」の要素(複数選択)」2018年卒マイナビ企業採用活動調査(6月実施)

参 考 文 献

- ル＝グウィン、アーシュラ K. (1986) 「プリン・モー大学卒業講演」、篠目清美 (2006) 『世界の果てでダンス〈新装版〉』白水社
- れいのずる秋葉かつら・永原浩行 (2004) 『ジェンダーの言語学』明石書店
- S・ミルズ著、熊谷滋子 (2003 = 2006) 『言語学とジェンダー論への問い—丁寧さとはなにか』
- 中村桃子 (2001) 『ことばとジェンダー』勁草書房、中村桃子編 (2010) 『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社
- 西田司 (2004) 『不確実性の論理』創元社
- 大坊邦夫 (1998) 『しぐさのコミュニケーション—人は親しみをどう伝え合うか—』サイエンス社
- D・スペンダー著、れいのずる＝秋葉かつえ訳 (1990) 『ことばは男が支配する』勁草書房
- 吉岡泰夫 (2011) 『コミュニケーションの社会言語学』大修館書店